

## TOPIC | 1 | 2050年 電力の5、6割を再エネに 目安を提示

経済産業省 資源エネルギー庁は、2050年の脱炭素化に向け、今後の議論を深めていくための目安として、2050年に発電電力量の約5～6割を再生可能エネルギーで賄う案を提示した。

火力発電(石炭、天然ガス、石油)は、電力供給量の7割以上を占めるが、温室効果ガスの排出が課題だ。

国内におけるCO2排出量の4割以上が火力発電に由来し、うち約半数が石炭火力となっている。2050年のカーボンニュートラルの実現に向けて、電源全体の脱炭素化が不可欠であり、火力発電の在り方の抜本的な見直しが求められている。

こうした中で経産省は、「2050年における各電源の整理

(案)」を提示した。2050年における主力電源として、引き続き最大限、再生可能エネルギーの導入を目指す。調整力、送電容量、慣性力の確保、自然条件や社会制約への対応、コストを最大限抑制する一方、コスト増への社会的受容性を高めるといった課題に取り組み、2050年に、発電電力量の約5～6割を再生可能エネルギーで賄う。また、燃焼時に炭素を出さず、調整力、慣性力の利点を持つ電力供給源として水素・アンモニアの活用拡大も進める。水素・アンモニアで2050年の発電電力量の約1割前後を賄うことを参考値として示した。

現在、発電電力量の約2割を占める再エネの積極的な導入を進め、2050年までに拡大させる案が示された。

## TOPIC | 2 | ハウスメーカーでウイルス対策の提案が加速

ハウスメーカーでウイルス対策の提案が加速している。

アキュラホームは、ウイルス対策を標準化した戸建住宅新商品「地球と家計にやさしい家」を発売した。病院や医療現場で導入されている「ウイルスキラーエアシステム」を住宅業界で初めて導入、ウイルスを不活化する。ドアノブやスイッチ、取手、手すりなどに、ウイルスを不活性化させる「ウイルスシールド加工」も施した。

ミサワホームは住宅新商品「SMART Brands WS」で、医療施設で取り入れられている設計手法を取り入れた。住宅をウイルスや細菌の侵入を前提として重点的に対策するレッドゾーン、病気になった家族も使用するイエローゾーン、安全なホワイトゾーンの3つに分け、空間動線や建材・設備、室内空気環境を提案。レッドゾーンには玄関手洗いを設け、イエローゾーンには抗ウイルス建材を採用。ホワイトゾーンにも、衛生的な空気環境を整える「フロアセントラル換気システム」を採用し、窓を閉めていても換気できるようにした。



アキュラホームの戸建住宅新商品「地球と家計にやさしい家」

積水ハウスは次世代室内環境システム「SMART-ECS(スマート イクス)」で、戸建住宅での新たなウイルス対策を開始している。LDKなどの生活空間から玄関などの非生活空間に空気が流れるように換気システムを設計。加えて、LDKには24時間換気システムの場合と比べて微細な汚染物質を約2～5倍素早く除去できる天井付空気清浄機を導入している。

家庭内でのウイルス対策は長期化する可能性がある。ハウスメーカーの提案は今後も加速していこう。